

●平成二十一年度

第五回一日研修旅行

「千家十職×みんばく茶の湯のものづくりと世界のわざ」展

見学とゼミナール聴講

日時・平成二十一年五月十六日

訪問先・国立民族学博物館・大阪

参加者・八十二名

四十名募集のところ、九十二名の応募があり、バス二台で催行いたしました。

国立民族学博物館では、博物館が収集してきた二十六万点にも及ぶ資料を活用する試みとして、千家十職が選り出した資料をもとに、新たに作品をつくり、それらを歴代の逸品や世界の諸民族が生み出した民族資料とともに展覧されていました。

参加者は、十職十家がそれぞれの職域や感性によって選ばれた資料を基に制作した作品を興味深く鑑賞しました。



大阪日本民藝館では「茶と美・柳宗悦・茶を想う。」を鑑賞。

日本庭園では茶室・沓庵での昼食後、万里庵を見学。千里庵にてお抹茶をいただきました。

午後からはみんばくゼミナール「千家と職方」講師筒井紘一（茶道資料館副館長）に出席。十職の成り立ちや好み物語生過程の話をお聴きしました。（P6～P9に講演録抄を掲載）

参加者は新緑の美しい万国博記念公園で、有意義な一日を過ごしました。



千家と職方

筒井 紘一

（茶道資料館副館長）

講演日・平成二十一年五月十六日

〈はじめに〉

この国立民族学博物館には二十五、六万点の資料が収蔵され、それを十職と関連させた特別展「千家と職方」の展覧会が開催されているが、この担当の八杉先生のアイデアが大変すばらしい。ミャンマーには、王家、王家に属している「花十種（パンスミヨ）」があるそうだ。

千家はもちろん王家ほどではないが、しかしながら、そうした同様の職方を抱えて、そして、十人に限ったわけではないけれども、共同で色々なものを造っていくというようなことをやって約四百年間続いてきた。現代における集積がこうして展覧会にあらわれたと思われる。また、それぞれの家がそれぞれの特色を持って、世界のそれと合わせて展覧を見られるというのはおもしろい。

ご覧になるとお分かりのように、歴代が全部きちんと大体わかる家と、わかりにくい家があるので、そのところを含めて今日「千家と職

方」ということで話をさせていただきますと思う。

〈近代のようす〉

千家もそうだったし、それから職家も同じく四百年の間で最も疲弊し、そして存続できるかどうかが危ぶまれた時期が明治時代であった。

明治になると、日本のほとんどすべてがヨーロッパ第一主義であった。そうした中で京都で育ってきた伝統的な文化というのはもう全く忘れ去られていた。

例えば、江戸時代と同じように職方が家族だけで質素に生活していると思うだけならそれほど問題は無い。三井などは職家がつくったものを自分のところへ持ってきたら買ってあげるということで、現在の三井文庫には明治期の作品がたくさん残っている。

また、近江八幡の豪商西川松齡がいるが、官休庵なので、武者小路千家を徹底的に守ってくれた。その一

方裏千家も守っていたということがあるが、江戸時代以来裏千家の茶道を大変好意的に守っていたのが住友家であった。しかし、そういう家が支えてくれるとはいえず、大変厳しい状況だった。

千家を考えてみたときに、例えば裏千家の当主は明治二十四年頃東京へ出ていく。当時の家元は十三代圓能齋で、十四代の無限齋家元は明治二十六年に東京で生まれている。

関西では藤田伝三郎、野村徳庵などがよくやく茶道に興味を持ち始めた頃であるが、東京には、井上世外がいた。外務大臣を務めた権力者の井上世外は徹底してお茶が好きだった。その井上世外とおつき合いするためにはお茶を知らないといけない。そういう中で育ったのが、松方正義、益田鈍翁、藤原銀次郎、松永耳庵などの東京の大数寄者たちであ



る。その人たちは濃茶、薄茶と炭手前は最低限できないといけない。そうなる、そういう人たちに教える場があるから東京では需要が多かった。それで、六、七年いる間にその地盤が整って、京都へ戻ってきたし、明治三十年代によくやく日本文化を再評価する意識が出てきた。

では、鈍翁を中心にした東京の大数寄者たち、その人たちが千家の職方の道具を買うかという、全く買わない。東京の人が、本当に目の色を変えるほどの漆器という「喜三郎」。非常にシャープで薄さが違う。数寄者たちはほとんど膳は喜三郎を使っている。益田鈍翁も樂の新しい、弘入であるとか惺入であるとかを喜んで使ったりしない。自分で鈍阿焼という焼物を造らせる。

このように、東京のお茶と関西のお茶は違うので、職家は大変だった。

〈利休の時代〉

では、千家と職家の関係はいつからかということであるが、時代は上るが、まずは利休の時代を見ていく。珠光から始まった草庵の茶がその後どうなっていたか。奈良は珠光の出身地でもあるが、『松屋会記』の「松屋」という塗りの家があった。この『松屋会記』という本は天文二年（一五三三）に始まって百三十四年間書き続けられてきた。だから、茶の湯の流れを見ていくためにはこれが一

番わかりやすい。そこに堺町人の茶会に行った内容が書いてある。他流試合に出かけたようなものだろう。

天文十三年（一五四四）には堺の茶会に行つて、奈良と全く違うお茶を見て驚いている。それは非常に新しいものを取り入れていくお茶で、中国や、それから南蛮の貿易で入ってきたものを中心になっている。どうしたものを使っているかという、日明貿易で入ってきた品物を使用する。すなわち足利義政や能阿弥というような書院茶の影響があるということ。唐物が中心で使われてきたということになる。

そうした唐物中心の中で利休が成長してくる。初めて利休が世間に登場するのが天文十三年（一五四四）、利休二十三歳の年で、松屋を招く。ここから始まった利休の茶の生涯をみてみると、七十歳で没するまでの間、四つに分かれる。

最初はこの唐物の時代で、これは二十代から四十代ぐらいまでにあたる。

次は、見立ての時代で、それが釣瓶の水指。利休が二十代の後半、三十になるぐらいのところから釣瓶を使い始める。それが木地の釣瓶か、または銅の釣瓶なのかははっきりしない。インドネシアの国立博物館にあった釣瓶の写真を持ってきた人がいて、見たら、浄益の利休所持写し

という、真ん中にかけるようになっていた銅の釣瓶、それと全く同じものである。そうすると、利休の時代にたくさん入ってきたのではないかと思う。それは、儀式で使うものではなく、それを南蛮貿易の商人たちが持ち込んだのではないかと思う。どうしたものなのか木地の釣瓶なのかどうかは不明だが、そうしたものを使つていく、これが見立ての最初である。

では、見立て自体を最初にやったのは誰かという、珠光ではないかと考える。それは何を見立てたかという、手桶である。室町時代までは、桶というのは水を入れる器としては非常に多く使われているが、すべて抱えている、抱き桶の形式である。手があれば非常に楽だが、作る時も大変で、作業が難しい。また、手があると重ねられない。手桶が一般的になるのは江戸時代になってからである。桶は昔から釜に水をつぐため、囲炉裏の傍らに置いておく水指としてはよく使われてきたものだった。

珠光という草庵茶をはじめた人が手桶を考え出したのが始まりで、一応伝えられているのはそれは木地の手桶だった。その次が武野紹鷗で、同様に手桶を使うがその手桶は塗つたといわれている。珠光は木地、紹鷗は塗りだった。

それに対して利休はどうしたか。利休は足をつけたといわれている。茶の湯で使われた最初の手桶が見立てだったのか、茶会用に造られたのかの判断は出来かねるが、もし、一般的には手無しの桶が常用であったのに対し、茶の湯の世界で初めて手桶が考案されたとするならば、それが茶道具として日本で初めて製作されたものだといってもいいのではないか。

資料の「十一月二十三日 喜□あて」の利休の手紙は表千家に残っている手桶の水指に添っているが、ここに足の記述がある。

手桶数五ツ
下可給候此内三ツ
一段急申候足ノひろさ
以前申候た、ミの目
二ツの内にあるほと
にて候ぬり又惣の
なりいかにもよく
きんせらるへく候
恐々謹言

十一月廿三日 宗易(花押)
喜□ 抛斎
まいる 宗易

冒頭に「手桶を五つ」と書いています。そして「このうち三つは急ぎます」と書いている。「一段急申候」とあるが、「五つのうち三つを急ぎます」と。その次に「足ノひろさ」

と書いてある。これが足の幅について、足の幅は「た、ミの目」、「以前申したとおりに畳の目二つのうちにおさめてくれ」と書いてある。「また惣のなりはよく吟ぜらるべく候」と書いてある。「吟味してください」ということであるが、よく吟味してくださいということとは手の高さ。手桶というのは必ず蓋が一枚に分かれ、向こうに重なるのだが、手が高くと形が悪くなる。いえば、これが利休による職人への注文の最初だろ

う。ただ、このときにはまだ職方というのではない。資料の宛先は、「喜」の次が消えているので四角が入れているが、これは余三、記(喜)三という武野紹鷗の時代からの塗師、喜三に注文したということがわかる。そして、他にも「ぬし屋紹甫」宛のものがあり、決まった職人はいなかったというのがわかるのである。こうして、利休は唐物を使っていた時代から、五十歳に入ってから見立ての時代に移ってくる。その見立てがこの手桶であり、そして釣瓶になるのである。その他、有名な「柱籠」という籠の花入などで、見立てしていく時代が五十年代まで続くのである。

その後、今度はジレンマの時代がやって来る。利休は六十近くになつて待庵をつくる。茶の境涯としてはずっとわびへ向いているのに、

秀吉のためにつくったのがあの黄金の茶室、または大きな書院であっただろうとするならば、そうした利休の茶の境涯と周囲の環境との間にジレンマが生まれてきたのではないか。このジレンマの時代が六十代の半ばぐらいまで続く。天正十五年のあの北野大茶の湯の頃ぐらいか、または、秀吉の黄金の茶室を使って禁中茶会をするのが天正十三・四年だが、利休はもう六十三歳になつている。そのぐらゐの頃から、自分の目指す茶の境涯に向かって進もうと思いはじめたのではないか。そこで生まれてくるのが、長次郎に注文したあの黒茶碗である。

利休は長次郎に黒い茶碗を造らせて、大和郡山城の当主だった秀吉の弟、大和納言秀長のところに持って行く。秀吉は奈良にいる茶人たちにそれを高値で売った。こうして殖産をしている。城を直したり、武器を購入する費用の捻出である。それで利休は、「売僧の頂上」と言われる。「売僧」とは悪徳の僧のことであるが、安く造らせたものを高く売つてという感覚。実際に松屋が奈良の茶会に招かれたときに、黒茶碗を随所でみている記録がある。最初は天正十四年で、奈良でどんどん使われていく。

そして、同じ頃に利休が自分の好みをつくらせるもう一人の人物を見出す。それが辻与次郎という、釜師

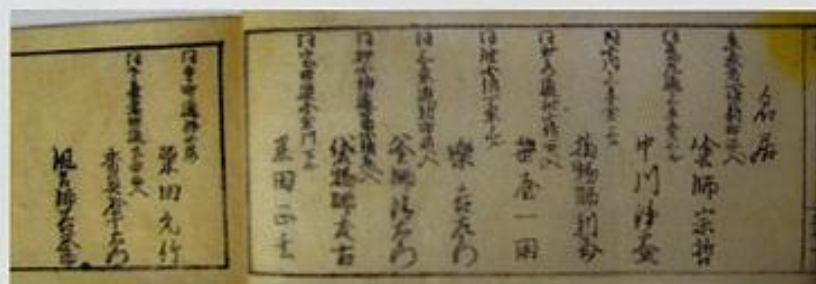
である。辻与次郎の家は三代でなくなり、大西のほうへ移っていくが、大西の初代、二代というのは、遠州の釜師で、大西の初代から三代の頃はまた辻与次郎や九兵衛が千家にはいる。その、与次郎に造らせたのが阿弥陀堂釜である。

『蓬源齋書』にある文を要約すると「有馬の阿弥陀堂の僧が大釜を望んだので利休がそれを与次郎に造らせたが、余りにできがよかつたので二つとも阿弥陀堂に渡さなかつた」という。それは何故なのか、わび道具というのは「今少しかくあれかし」という。文句をつける余地のない完全なる道具は書院茶の道具である。

阿弥陀堂の釜というのは、普通の炉壇には入らないぐらゐ大きい。九寸二分以上ある。ところが、その形の大きさに比べて口が小さい。これがわび道具である。それから、「地をくわつくとあらし候へ」という。膚を荒す、あら肌にしなさいと利休は注文している。そして、『茶話指目集』によると、利休は塗師の盛阿弥にも「漆(ウルシ)の滓(カス)を混ぜてざつとぬれ」といって黒薬を造らせている。それがわび道具である。こういうふうにして利休の注文が茶碗、釜、塗物と発展していく。

〈千家と十職〉

その後、宗旦の頃になって宗哲、一閑等が好みを造るようになり、元



で浄玄の時代。大西家は宝暦頃から千家に入ってきたと思われこの頃には千家の職方になっている。

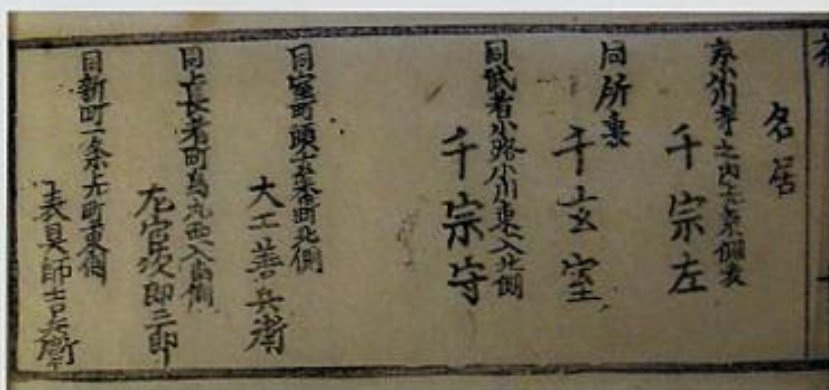
次が指物師の利齋で、次に中川浄益があり、そして、一番最後に、塗師宗哲、中川浄益、指物師利齋、笹屋一閑、これが今の飛来一閑のこと、それから、樂吉左衛門、釜師清右衛門、袋師友湖、黒田正玄。黒田正玄ももともとは遠州の柄杓師だった。千家に入ってくるのはこの頃からではないかと思う。それから、栗田元竹。千家で現在唯一いないのは籠師だが、この栗田元竹が籠等を造っていた。香具屋十右衛門という人が出ているが、これは、多分好みの香を造ったのではないか。それから、風伊師善五郎が出てくる。全部で十一家ある。

また、後編にも宗哲や一閑などの名がみえ、最後のところに、三千家の名前の後に、大工善兵衛、左官二郎三郎、表具師吉兵衛の三家の名がみえる。こうやってあわせて十四家あるが、十職になってくるのは江戸時代も幕末の頃であろう。

資料「宝暦八年 宗旦百年忌百会控」は宝暦八年（一七五八）に千家の三代の宗旦が亡くなって百年経った年忌の茶会の記録である。

これを見ると、一番最初に大徳寺の僧を呼んでいるが、表千家や裏千家の人と一緒に十職が呼ばれている。十月十三日には千宗左。千宗左

と裏千家の当主・千宗室は親戚で、表千家六代原叟の三男がこのときの裏千家の家元八代一燈宗室である。この千宗左は甥の八代碎啄斎宗左である。そのとき、塗師の宗哲が一緒に来ている。それから、次の十月十九日は千玄室なので、これが自分の息子であり裏千家の九代を継ぐ石翁、それと一緒に今度は樂吉左衛門を呼んでいる。続いて、二十一日には指物師の利齋が招かれ、十一月二



十日に釜師の浄元が招かれている。それから、翌日に釜師清右衛門。これが多分当代で後の浄玄になる。それから十二月二日に袋師友湖、十七日に黒田正玄が招かれ、最後の部分は「客拾人」となっていて、塗師宗哲、樂吉左衛門、竹屋玄斎、これは竹屋で前述の「数寄道具定値段附」では「元竹」だが同じ家であろう。

それから、釜師浄元、指物師利齋、柄杓師正玄、縛物師の浄益、袋師友湖、大工善兵衛が入って、表具の吉兵衛が入っている。ここでは永楽善五郎と飛来一閑が抜けている。代替わりの時期などによって、招かれなかったりしているのではないかとと思われる。

〈おわりに〉
こうやって残された記録に入ったり抜けたりしながら職方として十人にまとまっていくのは、江戸時代の終わり頃、大徳天保年間、一八四〇年ぐらいから以後だと思われる。利休の二百五十年忌が行われた天保の頃には十家が担当して色々手伝いをしてる記録が残っている。

そこから明治の大変な時期には、家業の存続も大変でばらばらになりかけたが、それを乗り越えて現代に続いてきた。そして、今日のこの展覧会に見られるように現在も千家の職方として道具を作り続けているのである。